

週刊

GAINAX総監修ビジュアル・ガイドブック

新訂版

EVANGELION

CHRONICLE

エヴァンゲリオン・クロニクル

24

定価690円(税込)

2010/7/20

Mechanic Sheet

第15使徒アラエル

Character Sheet

碇シンジ C

Installation Sheet

NERV D

Timeline Sheet

心のかたち人のかたち

Tactics Sheet

E計画

Technology Sheet

エントリープラグ B

Extra Sheet

用語辞典 / 企画書 /
トピックス



**特製バインダー
発売中!**

EVANGELION CHRONICLE

24

目次 | CONTENTS

Mechanic Sheet メカニックシート

第15使徒アラエル

01-04

Character Sheet キャラクターシート

碓シンジ C

05-08

Installation Sheet インスタレーションシート

NERV D

09-12

Timeline Sheet タイムラインシート

心のかたち人のかたち

13-16

Tactics Sheet タクティクスシート

E計画

17-20

Technology Sheet テクノロジーシート

エントリープラグ B

21-22

Extra Sheet エクストラシート

用語辞典

23-24

企画書

25-26

トピックス

27-32

新世紀エヴァンゲリオン オフィシャルページ

エヴァンゲリオンのリアルタイム情報はこちらで！

PCサイト

▶ <http://www.gainax.co.jp/anime/eva/>

携帯サイト▶ <http://wpp.jp/eva/>

エヴァンゲリオン オフィシャルストア

▶ <http://www.evastore.jp/>



ココからGO!

[発行日] 2010年7月20日

[発行] 株式会社デアゴスティーニ・ジャパン
〒104-0045

東京都中央区築地4-7-5 築地KYビル

[発行人] 小河原和世

[編集人] クロス中山慶子

[チーフエディター] 安部 翠

[印刷] 大日本印刷株式会社

©2010 K.K.DeAgostini Japan All rights reserved.

[編集協力] 株式会社ウィーブ (石川裕人/田代 豪/大久保圭/本多らな)

[監修] 株式会社ガイナックス

©GAINAX・カラー/Project Eva. ©GAINAX・カラー/EVA製作委員会

<オリジナル版>

[編集協力] 有限会社 メガロマニア (富田英樹/高村泰稔/渡邊洋三/
加藤和弘/山田展寛/桑木貴章/鈴木秀治/公森直樹)

[執筆] TRAP (西川紗矢/遠藤智子/佐々木まりな)/ほろり春草

[イラスト] 市川裕文/深野洋一 (M.I.C.) /射尾卓弥/森下直親

[デザイン] ローカル・サポート・デパートメント (島田英明/角田正明)

株式会社 インフォビジョン (河野幹哉/安川純史/田中治彦)

<新訂版>

[編集協力] スタジオ・ハードデラックス株式会社 (伊藤桃香/米良真一)

[デザイン] スタジオ・ハードデラックス株式会社 (松本優典)

●書店向け注文受付センター

(書店様からのご注文を承ります)

TEL 03-5212-5311

(月～金 9:30～17:30 土日祝日を除く)

FAX 03-5212-5312

●読者サービスセンター

(本誌関連の一般的な質問を承ります)

TEL 0570-008-109

(月～金 10:00～18:00 土日祝日を除く)

※本商品は2007年に刊行された『エヴァンゲリオン・クロニクル』
(発売：ソニー・マガジズ)に改訂を加えて刊行するものです。

本誌の最新情報をCheck!

PCからもケータイからも同じアドレスでアクセスできます。

<http://deagostini.jp/eva/>



定期購読のご案内

週刊『エヴァンゲリオン・クロニクル 新訂版』は、毎週火曜日発売です(一部地域を除く)。シリーズ全号が確実にお手元に届くように、書店を通じての定期購読をお勧めいたします。最寄りの書店で、定期購読または予約購読をご用命ください。また、小社を通じての定期購読を希望される方は、次のいずれかの方法でお申し込みください。

1. 読者専用定期購読受付センターに電話またはFAXで

TEL 0120-300-851

(9:00～21:00 年中無休)

FAX 0120-834-353

(定期購読申し込み用紙をお送りください。24時間受付)

2. インターネットで

<http://deagostini.jp/eva/> (24時間受付)

※ケータイからも同じアドレスでアクセスできます。

3. 定期購読申し込み用紙を郵送

(「定期購読のお知らせ」がお手元がない場合は受付センターまでご連絡ください。)

特製バインダー発売中!!

週刊『エヴァンゲリオン・クロニクル 新訂版』は特製バインダー4冊に収まります。エヴァンゲリオン大百科を完成させるのに不可欠な特製バインダー2・3巻の2冊セットを通常価格1,790円(税込)で発売しております。お近くの書店でお求めください。

※4巻目のバインダーは第31号でプレゼントいたします。



下記弊社プライバシーポリシーに同意の上、お申し込みください。【個人情報のお取り扱いについて】 1. 個人情報の利用目的 商品の発送と連絡、各種情報・資料等のご案内を目的とします。 2. 第三者への個人情報の提供・開示等 法令の規定に基づいて司法・行政機関等からの情報開示の要請を受けた場合を除き、第三者に個人情報を提供・開示等を行うことはありません。 3. 個人情報の委託と管理 弊社は注文の受け付けと確定、商品の配送、クレジットカード会社への連絡と支払いの処理、代金収納専門企業による売り上げ代金の収納、データの分析、カスタマーサービスなどのために必要な範囲内で保有している個人情報を他社に委託しています。契約等により委託先を厳重に管理いたします。 4. 個人情報の提供の任意性 個人情報を弊社に提供されるかどうかは、お客様の任意におまかせします。但し各申込フォームの項目に未記入部分があると手続きがとれない場合もあります。(購入に関するお問い合わせは定期購読受付センター：0120-300-851へ) 5. 個人情報に関する開示請求等のお問い合わせ窓口 デアゴスティーニ・ジャパンCRM部長 電話番号：03-5309-8286 ※受付時間 10:00-18:00 (土日祝日、弊社休業日を除く) ※弊社ウェブサイトで個人情報保護の詳細をご案内しております。 <http://deagostini.jp/security/>



第15使徒

アラエル



ヒトの心
を暴いた
天空の使徒

FIFTEENTH ANGEL

ARAEL



UNKNOWN

まさか、使徒は**ヒトの心**を知ろうとしているの？

(赤木リツコ)



D A T A

呼称：15th ANGEL
第15使徒

天使名：ARAEI
アラエル

象徴：SYMBOL
鳥

能力：ABILITY
可視波長のエネルギー波

ヒトの精神の奥底にまで接触した使徒

「これ以上心を犯さないで！」——セカンドチルドレンの絶叫がアラエルの特殊な攻撃方法を物語っている。これはヒトに対する一種の接触ともいえるが、結果的に対象の精神が侵食され、EVAは活動停止に陥った。そのため操縦者を直接狙った精神攻撃ともとれよう。



EVAの攻撃可能範囲外である衛星軌道上に身を置き、操縦者への一方的な精神攻撃によってEVAを無力化した。



アラエルの放った可視波長のエネルギー波は、操縦者の秘めた心の最深部までも暴き、その自我を侵食していく。

衛星軌道上に出現したアラエル。EVA式号機に精神攻撃を仕掛けるが、EVA零号機の投擲したロンギヌスの槍によって殲滅された。

ユダヤの伝承において、アラエルは鳥を司るという。また、ソロモンの契約においては神の光の意を持つウリエルの別名ともされる。



零号機が投擲したロンギヌスの槍は衛星軌道上にまで届き、A.T.フィールドを突破してアラエルを消滅させる。

↓コア部分周辺



関連事項 RELATED MATTER

- ロンギヌスの槍
- 惣流・アスカ・ラングレー
- EVA式号機
- 使徒



A.T.フィールドに対する貫通能力を有す槍。フィールドを突破する際に螺旋構造が一斉に逆立ち、突破を後押しした。

アラエルの体構造

翼を広げた光る鳥のようなフォルムを持つ。その発光する姿は、第16使徒アルミサエル、南極で発見されたアダムとされる巨人もまた同様だが、詳細は不明。



精神攻撃(もしくはヒトとの接触手段)としてA.T.フィールドを活用しているほか、当然ながら防御手段としても展開しており、衛星軌道上に届いた大出力ボルトライフル改の射撃を防いでいる。

1 体外のコア

鳥でいう、くちばしのような先端部分の裏側に位置するコア。その部分にむき出しで浮いており、衛星軌道上という地の利を理解してか、コアの隠蔽や防御は施されていない。



NERV側が運用する兵器の射程や威力を知っているかのようにコアは無防備である。事実、EVAの通常兵器は通用せず、ロンギヌスの槍というオーバーテクノロジーの遺物によって殲滅されている。

2 可視波長のエネルギー波

ヒトの自我侵食を引き起こす精神攻撃。照射直後より精神汚染が開始され、精神回路を引き裂いて自我を侵食していく。その結果、EVAを活動停止に追い込んでしまう。これはMAGIカスパーによりA.T.フィールドに近いものと分析されている。また、L.C.L.による精神防壁は触媒としての効果すら発揮せず、EVAにとって防ぐ手だてはなかったと考えられる。



肉眼で確認できる波長で、熱エネルギーの反応はない。何らかの精神波のようなもので、その光は、まるでヒトの精神波長を探っているかのようにと赤木リツコは独白している。

可視波長のエネルギー波を受けた人物は、トラウマとして抱えた過去だけではなく、心の奥底に秘め、自覚しなかった記憶さえも強引に暴かれることとなるようだ。



Illustration by (twinbell) Tokiko Yuzawa

特記事項

ヒトとの接触を図った使徒

第3使徒～第17使徒の中で、ヒトとの接触を行なったと考えられるのは4体。これら使徒がヒトと接触するにあたり、接触者の内面自我を「よまし」とすることでヒトとの対話を試みている例が多い。これは使徒が“個”の種族であり言葉などの複雑なコミュニケーション手段を持たないゆえであろう。そしてレリエル、アラエル、アルミサエルと接触を重ねることでヒトを学んだ結果、接触到最適な“ヒトの姿”を持ったタブリスが誕生したとも推測できる。彼がヒトに好意を抱いたことで、皮肉にも使徒は滅びの道を歩むこととなる……。



使徒がヒトと接触する際は、接触相手の「もうひとりの自分」の姿をとって行なうことが多いようだ。

タブリスの接触はほかの使徒と一線を画しており、ヒトの姿にてサードチルドレンと直接対話を試みている。

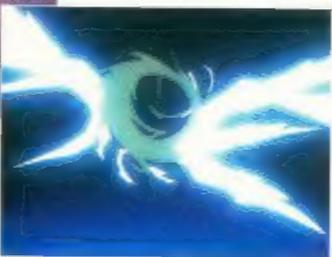


アラエルの活動記録

衛星軌道に出現したアラエルはその場に静止し、NERV本部から一定距離を保つ。迎撃のため出撃したEVA式号機が長々距離射撃にてアラエルを狙った際に、可視波長のエネルギー波を照射。同機に精神攻撃を開始する。その際にバックアップで出撃したEVA零号機から攻撃を受けるも、A.T.フィールドの展開で防御し、精神攻撃を続行。式号機の活動停止に成功するが、零号機により投擲されたロンギヌスの槍によってA.T.フィールドごと貫かれ、殲滅されてしまう。



式号機の長々距離射撃照準中に、射程圏外より可視波長のエネルギー波を照射。同機に対して精神攻撃を仕掛ける。



ロンギヌスの槍が貫いた瞬間、吹き散らされるように本体が消滅しており、エネルギー体のような存在だったのかもしれない。

アラエル侵攻記録

アラエル殲滅

▲ 零号機からロンギヌスの槍を受け消滅

▲ 式号機に可視波長のエネルギー波を照射

▲ 衛星軌道に出現



第12使徒レリエル	第15使徒アラエル	第16使徒アルミサエル	第17使徒タブリス
接触方法	接触方法	接触方法	接触方法
虚数空間への取り込みにて接触	可視波長のエネルギー波にて接触	侵食と融合にて接触	ヒトの姿による対話と触れ合いにて接触



苦悩の 果てに



NERV



3rd Children

碇 シンジ

SHINJI IKARI

自分を 見出した少年

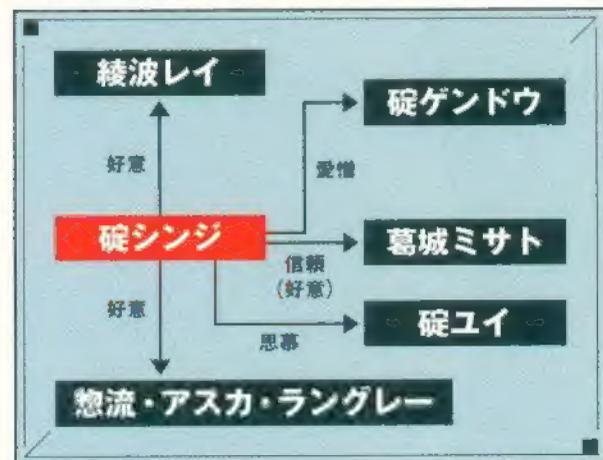
個人情報

名前	碓シンジ
年齢	14歳
国籍	日本
生年月日	A.D.2001/06/06
血液型	A型
所属	NERV/EVA初号機専属操縦者

「自分の価値が欲しい。誰も僕を捨てない、大事にしてくれるだけの」——サードチルドレン、碓シンジは自らの存在理由を求め続けた。初号機専属操縦者として戦闘をこなし、勝利を重ねていくシンジ。順調に成長しているかのように見えたが、その精神世界で心の断片を見る限り、彼の内面は非常に不安定なままであった。幼い頃から愛情に飢えていたことに加え、EVAに乗ることがいつの間にか当然の如く扱われる環境に、彼の心は違和感を覚えていたのかもしれない。「誰かが自分を認めてくれている」という確信こそ、シンジが渴望していたものだった。そんな折、自分を拒絶していたはずの父に褒められたという事実は、父への感情に変化をもたらしたようだ。父の言葉を自分への肯定と受け取ったシンジは、EVA搭乗に対して積極的な感情を持つようになる。自分を捨てた父を憎みながらも、一方で無意識に父からの愛情を求めるといふ、背反した心理がシンジの中に生まれたと思われる。

また、他人の中に心の拠り所を模索するシンジは、他人を求めながらも他人によって傷つくことを怖れるというアンビバレンスも抱えていた。信じていたカヲルに裏切られたことは、その心理を傷つことへの恐怖に傾かせるには十分すぎる出来事だったのだろう。しかし、心を閉ざした彼を立ち直らせたのもまた、他者との対話であった。シンジには初号機を媒介とした多くの人間とのつながりがあり、そのつながりが自分を形成しているのだと気づいた時、彼は補完の方向性を決める重要な役割を果たした。

人物相関図



- 綾波レイ
- 惣流・アスカ・ラングレー
- 葛城ミサト



EVA零号機の専属操縦者。EVA操縦者の適性を持つ最初の被験者であり、ファーストチルドレンと呼ばれる。

表情 / 服装



←他人の顔色を気にするシンジが明るい表情を見せるのは珍しい。笑顔といえども愛想笑いに近い表情をすることも多い彼は、誰に対して心からの笑顔を向けるのだろうか。



→まわすく前に見据えるシンジ。初号機とのシンク口車も高い数値で安定し、エースパイロットとして活躍している時の彼は誇らし気でもある。



精神世界の中で自分の内面と向き合うシンジ。様々な思考が錯綜する世界からは、彼の重く生々しい苦悩が見てとれる。



←平常時のシンジは感情をあまり表に出さないためか、このような表情のない顔が散見される。ひとりで内向的思考にふけることも多いようだ。他人を寄せ付けぬ雰囲気は、満たされない心の表れだろうか。

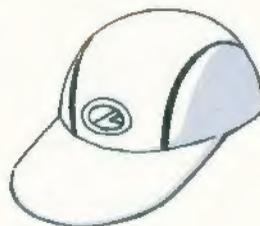
正面



背面



側面



→袖をまくり上げ、サンダルを履くシンジ。洋服にはあまりこだわらない性質なのかもしれない。また、普段はあまり見られないが、時にはシンプルなデザインのキャップを被ることもあるようだ。

↑Tシャツにハーフパンツという、動きやすさと過ごしやすさを突き詰めたようなスタイルの私服。一見すると活発な普通の少年のようにも思える。

碇シンジ

が求めたもの



←ゲヒルンに連れられてきた幼い頃のシンジ。明るい配色のかわいらしい服を着せられ、親に大事にされている様子が伺える。現在のラフな私服とは対照的なお坊ちゃん風のスタイルは、ユイの趣味なのだろう。

←ゲヒルンを訪れた際、好奇心旺盛な年頃らしい行動を見せているシンジ。このあと彼の眼前で、接触実験によるユイ消失という、すべての始まりともいえる事件が発生する。

幼い頃に母を失い、父に捨てられたも同然の状態でも成長してきたシンジ。家族の愛情を知らない彼にとって、自らを無条件に愛してくれる存在はないに等しかった。そのことは彼の人格形成に大きな影を落とし、常に周りの顔色を伺いながら過ごすという、現在の性格を作る要因になったと思われる。

ところが、初号機の操縦者として活躍したシンジに対し、NERV入所時から冷たい態度を取り続けてきたゲンドウが「よくやった」と労いの言葉をかけた。この言葉はシンジに多大なる影響を与え、のちに彼は「父に再び褒められることを望んでEVAに乗る」とまで話している。皮肉にも、シンジの性格を作り出した原因であるゲンドウによって、彼は自分を必要としてくれる人の存在を見出すことになったのである。最終的にゲンドウはシンジの肯定者にはならなかったが、その父に与えられたEVA初号機の存在がシンジの居場所を生み出すことにつながり、自分を認めてくれる人を求め続けたシンジに、一定の答えが与えられることになる。



自身の精神世界における他人の肯定、そして自分自身の肯定を得ることで「僕はここにいてもいいんだ」と気づいたシンジ。その瞬間に世界が開け、彼の周りの多くの人から祝福される。



冬月に対しEVAに込めた願いを語るユイの腕には、幼いシンジが抱かれていた。息子を見つめる瞳から無償の愛が感じられる。

シンジの母、碇ユイの墓前でゲンドウと会話した際、母の顔は覚えていないと話したシンジ。しかし、第12使徒レリエルとの戦闘時や、初号機搭乗中に肉体がL.C.L.に融合してしまった時といった「自身の内面と対峙するような出来事」の最中には、決まって母のイメージが現れている。彼には母の記憶がない筈だが、無意識の中で母が大きな存在となっていることは間違いない。また、シンジは自分を否定する父とは対照的に、母は自分を肯定し、優しくしてくれる存在として認識している節がある。幼い頃にその愛情を十分に受けられなかったためか、周囲の異性にも同じような性質を求める傾向にあるようだ。

母親の記憶

が与えた影響

EVA初号機

が与えたもの



一度はEVAを降りたシンジだが、避難中にアスカとレイの危機を知り、自分がやるべきこととして再びEVA搭乗を選んだ。父に向かって強くものを言うことに対する怯えが、震えをおさえるように握りしめた拳に表れていた。

ベークライトで固められた初号機を見て、自分が何もできないことを悟ったシンジ。しかし、そんな彼を励ますように初号機は自ら動き出した。幼い頃と変わらず、母の腕に守られていることにシンジは気づいたのだろうか。



何もない平凡な日々を望むシンジは、EVAの操縦者であるという事実を苦痛に感じていた。パイロットになったことで周囲の状況は劇的に変化し、個を主張することの苦手なシンジが「サードチルドレン」という唯一無二の個として存在しなくなってしまう。しかし、シンジから平穏な生活を奪うと同時に、初号機は周囲の人間関係における彼の居場所としての役割も果たし、結果としてアイデンティティの拠り所ともなった。また、初号機の内に母を、初号機に乗ることで父との繋がりを感じていたシンジにとって、EVA初号機とは家族の絆を具現化する存在だったのかもしれない。

人類補完計画 進行時の行動



EVA量産機に鳥葬のごとく捕食された式号機。自分の心の拠り所となりうるアスカの無惨な姿を見せつけられた時、シンジの心は絶望に支配されたのだろう。響きわたる彼の絶叫によって、人類補完計画の幕が開かれた。

遙か上空で生命の木となった初号機は、生命の実と知恵の実を手に入れたことにより神に等しい存在になったという。図らずも人々を補完する救世主の役目を担わされたシンジは、人類の進むべき未来を選択することとなった。



人類補完計画の進行中、シンジの精神は著しく均衡を乱していた。心許せる友人と信じたカヲルに裏切られ、心の拠り所を失ったシンジ。ミサトの命を賭した叱咤と、母なる初号機によって一度は立ち直りかけたものの、地上では非情な現実が待ち受けていた。凄惨をきわめる式号機を見た瞬間、絶叫と共にシンジの精神は崩壊寸前まで追い込まれたと思われる。この出来事はシンジの心を深く抉り、結果として心の補完を行なう人類補完計画にとって必要な、欠けた心を持った依代としての初号機操縦者を完成させるに至ったと考えられるだろう。

EVA量産機に取り囲まれた初号機は、シンジの叫びに呼応して月から飛来したロンギヌスの槍と共に上空へと拘引されていった。槍と融合した初号機は生命の木となり、それをもって人類の補完は進められる。この時、初号機ごと生命の木の内にあったシンジがどのような状態にあったのかは定かではないが、その後すべての人類がL.C.L.の海に溶け込んだ時にもただひとり人としての意識を持ち続けたと見られることから、シンジに人類の命運が託されたとも考えられる。本来の計画遂行者であったゼーレやゲンドウが、安らかな表情で終わりを迎えたことをシンジは知る由もなかった。父が発案した計画に巻き込まれた形であるにも関わらず、計画進行と同時に、奇しくもシンジ自身がこの計画の行く先を決める執行者となっていったのである。



←はっきりとした色の赤いシャツに青いジーパンを合わせ、制服時よりも明るい雰囲気に見えるシンジ。動きやすい服を好む彼らしい服装だ。赤と青がアスカとシンジのスーツの色に対応しているのは、偶然だろうか。



一体化するレイを、落ち着いた表情で見つめるシンジ。たとえ自分が傷つこうとも、シンジは他人の存在する世界を選択する。彼の「他人にもう一度会いたい」という気持ちが人類補完計画を未完に終わらせた。

他に誰も見あたらない空間に、ふたりきりで横たわるシンジとアスカ。精神世界ではアスカに心情を吐露し、彼女に救いを求めながらも拒絶されたシンジだったが、新たな世界の中でふたりの関係は変わっていくのだろう。



初号機を依代とした人類補完計画が進行する中、L.C.L.の海でシンジはレイと邂逅する。彼我の境界がなくなり、自分がどこにもなくなった世界はシンジの望むものではなかった。他人の恐怖を受け入れることを告げるシンジの目からは、怯えながらも前に進む生命の力強さが伺える。意識が現実に戻った時、人類補完計画が未完に終わった世界に横たわるシンジとアスカ。シンジが望んだ他人の存在する世界において、最初の他人となったアスカの首に彼は手を伸ばす。シンジにとってアスカは、自分を傷つける存在なのか、自分を形成する存在なのか。俯きながら嗚咽するシンジの心情を理解するのは難しい。

補完の 果て に見たもの

追加報告

もうひとつの世界

人類補完計画の進行中、シンジが気づいた、自分がEVAの操縦者ではない世界の可能性。その世界において、彼はごく普通の中学生として生活している。食卓には父が、台所には母がいる幸せな家庭。幼馴染のアスカと共に登校し、転校生が女の子だと聞いて期待を膨らませる。EVAの操縦者としては決して味わうことのできなかった、良くも悪くも平凡な生活がそこにはあった。

この世界のシンジは年頃の少年らしい言動が多く、他人に対して壁を作ることもないようだ。EVAに乗ることで生まれた様々な葛藤や父との確執もなく、明るい雰囲気をもとってクラスに溶け込んでいる。ありふれた学校生活こそ、シンジが望んでいた生活だったのかもしれない。



ユイに注意され、生返事を返すゲンドウ。この世界の彼は妻の尻に敷かれ気味の良き夫であるようだ。新聞記事から南極も存在していることがわかる。

転校生のレイにアスカとの関係を問いただされ、焦るシンジ。恋愛事情に敏感な、思春期の男の子らしい反応だろう。笑い声に包まれたクラスは青春そのものである。



美人教師、ミサトの登校に興奮するシンジたち。屈託なく笑う彼の学校生活は、楽しいことがあふれているに違いない。



ピラミッド状のNERV本部の頂点に位置し、非常に広い空間を有する執務室。最高司令官である碓ゲンドウ、副司令官の冬月コウゾウの2名は、この特殊な一室に結んでいる場合が多い。

本部内施設

近未来的な施設の役割とその概要

国連直属の特務機関、NERV。その最重要施設であるNERV本部は、国際的秘密結社ゼーレの後ろ盾を得ていた調査組織——ゲヒルンにおいて骨子の構築が進められていた。後にNERVという組織の心臓部となるスーパーコンピュータ「MAGI」、使徒に対抗し得る唯一の手段とされる汎用人型決戦兵器・人造人間エヴァンゲリオン、そしてピラミッド状の巨大な建造物であるNERV本部といった主要な設備、兵器、施設は秘密裏に準備されていた。そして西暦2010年——「MAGI」の完成と共にゲヒルンは解体され、使徒殲滅を主な任務とする組織、NERVに移行する。すべては、その全容が明らかにされていない「人類補完計画」をゲンドウが立案したことに端を発しているのだが、その事実を知る者はほとんど存在しない。

組織の設立当時、国連をはじめとするさまざまな組織に多大な影響力を及ぼしていたゼーレは、第3新東京市の建造という大事業を隠れ蓑とし、第3新東京市直下にあるNERV本部の建設に力を注いだ。NERV本部はゼーレが求めるままに優秀な人材、技術、

装備などを揃え、使徒襲来に備えることとなったのである。その施設、設備は一組織には過ぎたものであり、当時の技術水準を凌駕するものであった。2015年においてもその技術水準の高さは他の追随を許さず、EVAをもって第3使徒を退けたNERVは、国連の一組織でありながら実質的には国連軍すらも従える権限を有することとなったのである。もちろん、その過剰なまでの力の集中を懸念する声も少なくなかった。しかし、そういった声はゼーレの力によって抑えられ、NERVは超法規的集団として使徒殲滅(実質的には「人類補完計画」の遂行)に邁進していく。

ちなみにゲンドウら数名はゼーレと強いつながりを持っており、さまざまな事実を秘匿しながらNERVを操っていた。例えばNERV本部地下最深部には、ゲンドウら数名のみが知る施設が存在する。一般の職員はおろか、葛城ミサトですらその存在を知らないという施設は、徹底的に秘匿されたものといえるだろう。ゼーレ、NERV、日本国政府に属した3重スパイ、加持リョウジの存在がなければ、彼女はその施設に気付くことすらなかったと思われる。その一例をもってしても、NERV上層部の活動は不透明であり、その徹底した秘匿性が見て取れる。



関連事項 RELATED MATTER

- ゼーレ
- NERV
- ゲヒルン
- EVA



国連に多大な影響力を持つ秘密結社。「裏海文書」の記述に基づいて人類補完計画を完遂させるべく、特務機関NERVを操る。

**NERV職員の活動を支える
本部内施設**

国連直属の特務機関、NERV。その最重要施設であるNERV本部は使徒に対抗しうる唯一の戦力「EVA」を有していたため、使徒殲滅の最前線に置かれることを運命付けられていた。そういった状況が予想されていたためか、本部内には最新の技術を駆使した施設、設備が用意されている。ただ、ほとんどの施設の建設、設備の開発は、前身と言える調査組織ゲヒルンの頃から進められていた。必要な施設、人材、技術、装備はゲヒルンにおいて準備され、2010年、スーパーコンピュータ「MAGI」の完成をもってNERVへと移行。本格的な活動を始めることとなったとされている。NERVへの移行を見越していたためか、2010年当時の技術水準を凌駕する施設の確保がなされ、2015年においてもNERVは最新の設備を活用して使徒殲滅の任に当たることが可能であった。



当時の最高水準の技術を用いて進められたと考えられるNERV本部の建設。2010年には本部の建設はおおむね完成していた。

その任務の性質上、NERVの職員は生命の危機に晒されることが多く、本部内には最新設備を整えた医療施設が用意されていた。

特記事項

NERV本部の地下施設

対外的にNERV本部と呼ばれる施設は、セントラルドグマ内に建設されたピラミッド状の建物である。その地下には大深度地下施設(セントラルドグマ)と、最深部施設(ターミナルドグマ)が存在する。EVAの実験施設、EVA各機のケイブ、指令所などの主要施設はすべて地下施設であり、それらを含むすべての施設をもってNERV本部と考えるべきだろう。

なお、地下施設に関しては隠蔽すべき施設が数多く存在する。そのため、一般職員(広報部など)には進入に制限がかけられている可能性も考えられる。また、ターミナルドグマにはさらに強固なセキュリティがかけられているため、多くの職員は、その存在自体を知らないようである。



セントラルドグマにある第1指令所。そこに設置された「MAGI」の完成をもって調査組織ゲヒルンは解体され、特務機関NERVへと移行。使徒との戦闘を始める組織となった。



ターミナルドグマの101号プラントへの進入を果たすため。その際はゼロレイズパイプを突破したため、セキュリティカードもそのルートから入手したものと推測される。

**最新の技術を駆使した
NERV内の様々な設備**

NERV本部には様々な隠秘すべき情報、設備が存在した。そのため、無人ゲートによる入館管理が行なわれ、基本的に入館は職員に限られていた。とはいえ、その職員は相当数に

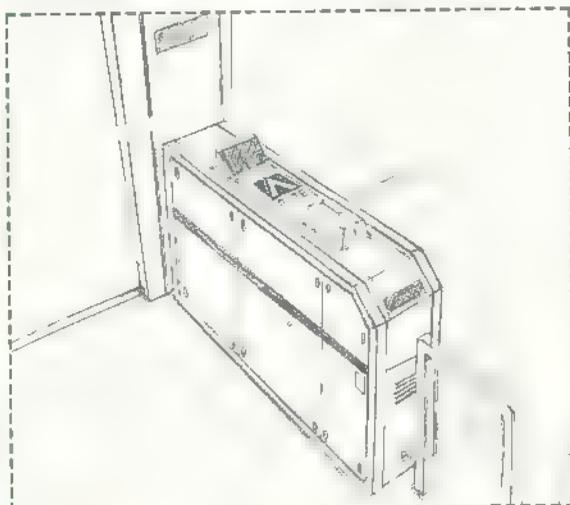
NERV本部には複数の職員が共用する設備が多数存在する。各設備は近未来的な機能を持ちつつも、懐かしさを感じる独特のデザインのものが多い。

のぼったと見受けられ、本部は広大かつ多階層の巨大建造物となった。そのため、オートウォーク、エスカレーター、エレベーターといった移動用設備は必須といえるものだったようだ。

NERV本部内の共用設備

■ 無人ゲート

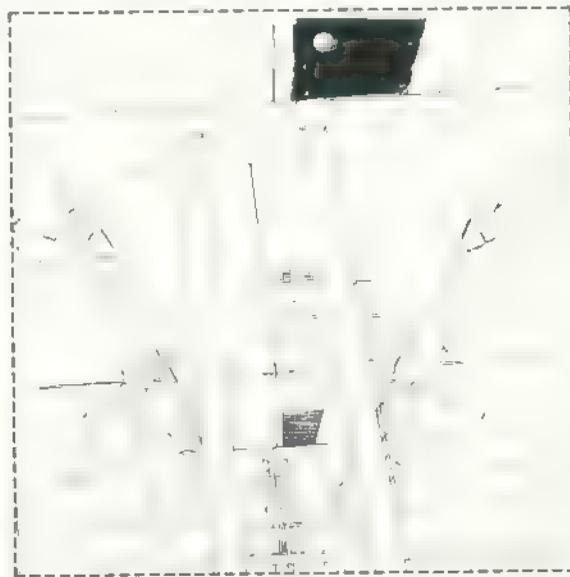
NERV本部の入口に設置された、外部からの侵入者を抑える無人入館ゲート。通る際には、職員用のパスカード(セキュリティカード)が必要となる。なお、電力供給が停止している場合には入口が完全に遮断され、進入する場合は非常用通路を利用する必要が生じる。ただし、非常用通路の配置は重要勤務者に支給される「緊急マニュアル」以外では確認できない機密事項であるようだ。



↑ 第1無人ゲート

■ オートウォーク/エスカレーター

NERV本部内の敷地が非常に広大であるため、その移動にかかる時間や労力を抑える設備が充実している。階層構造となっている内部には非常に長いエスカレーターのほか、オートウォークといった同フロア内の移動を補助する設備も備えられている。



↑ オートウォーク

■ エレベーター

エスカレーター、オートウォークと同様に、移動時間や労力を抑えるエレベーター。構造などは従来のものと変わらない。各階を行き来することが可能だが、最深部のターミナルドグマについては、セキュリティを解除できる上層部の職員のみ進入可能となっているようだ。



→ エレベーター内部

→ エレベーター外観

■ ロッカールーム

EVAの専属操縦者がプラグスーツに着替える際に利用する、男女兼用のロッカールーム。ロッカーはプラグスーツ用の減圧式乾燥ハンガーと、静電気除去システムを持つ標準服装用ロッカーがひと組となっている。なお、ロッカーの利用は操縦者に限られているようだ。



適格者の補充も想定して、ロッカーの数は多めだった。



→ ロッカールーム

追加報告

アナクロな支給品

NERVの近未来的な設備と比べ、職員個人に支給されるアイテムはなぜか前時代的なものが多い。例えば緊急マニュアルはプラスチック製のカード内に紙製マニュアルが封入されたものであり、ドキュメントホルダーは既製品と差異は少ない書類用ケースである。デジタルデータの流出を防ぐためにも考えられるが、もともとアナログ形式だった場合は定かではない。



NERV本部が停電した際、緊急マニュアルを素早く取り出し、EVA格納庫までたどり着いたシチュエーション。検索性には乏しいが、緊急時の強いやすさという点では、紙という媒体が最適だったといえる。



△ ドキュメントホルダー



△ 緊急マニュアル

特定の職員が使用する NERV内の施設

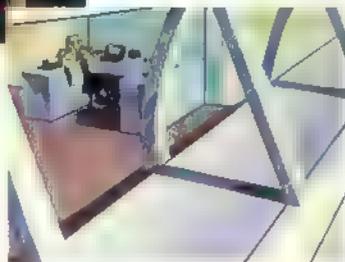
様々な部署に分けられ、多くの職員が勤務するNERV本部。一般の職員は通常の企業と同じく「職場」と言える部署に勤めているようだが、司令官や技術開発部の責任者、対使徒戦の作戦を立案する戦術作戦部の部長といった上層部の職員は、特別に設けられた施設を利用している場合が多い。

最高司令官や副司令官といった上級職のみならず、対使徒戦において作戦を立案する戦術作戦部の職員、EVAやMAGIなどの重要な設備を管理する技術局の職員といった面々は使徒殲滅を主な任務とするNERVにおいて「上層部」に位置する。NERV本部内には、執務室、作戦室、専用研究室など、組織の中核を担う彼らの活動をサポートするための特別な施設が用意されている。各施設に備え付けられた設備の詳細は明らかにされていないが、それぞれの活動に特化した最新の設備が用意されていることは想像に難くない



3方向の壁面に巨大モニターが設置されている作戦室。戦術作戦部のミサトがよく利用する施設で、具体的な作戦を立案する際に活用されている。

E計画責任者、MAGI管理責任者といった様々な肩書きを持つリツコ。その特別な待遇からも、NERVにおける彼女の重要度を窺い知ることができる。



●上層部及び特定の職員専用の施設

■執務室/作戦室

NERV本部の最上階に位置する執務室には、最高司令官と副司令官が待機している。作戦室には、基本的に使徒発見後に戦術作戦部のミサトをはじめとする職員が集まり、情報の分析と、具体的な作戦を検討することが多い。



←執務室



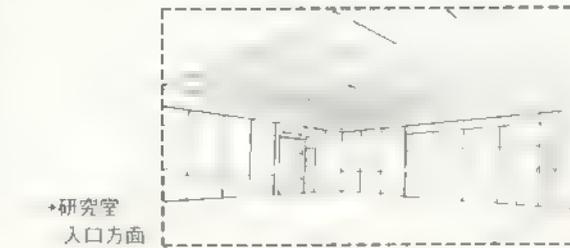
→作戦室

■赤木リツコの研究室

NERVにおいては最高司令官に比肩する存在といえるリツコ。機密事項を取り扱うことも多かったためか、彼女には専用の研究室が与えられている。ちなみに室内には、非常用シューターが設けられるなどの配慮がなされている。



←研究室 全景



←研究室 入口方面

NERV内に用意された 高度な医療施設

なぜかNERV本部を目指して侵入してくる使徒たち。NERVの職員は使徒殲滅という任務をまっとうするため、常にその身を危険に晒していると言っても過言ではない。不運にも傷を負った職員は第3新東京市ではなくNERV内に設けられた中央病院に収容されることとなる。

主にNERVでの活動において怪我を負った患者を収容し、医師が診察、治療を行なう医療施設。対使徒戦に携わる職員、特にEVA操縦者は危険に晒される場合が多く、最新の設備を導入した緊急処置室なども用意されていた。そのほかの治療に用いる設備についても、2015年における最新のものが揃えられていたと考えられる。ただ、非常に簡素な作り入院施設(病室)などを見て分かるように、施設自体は、旧世代的な病院とさほど変わらなかったようだ。ちなみに医療法における「病院」は入院用ベッド数が20以上ある施設を指すが、NERV本部中央病院がこれに該当するかは定かではない。

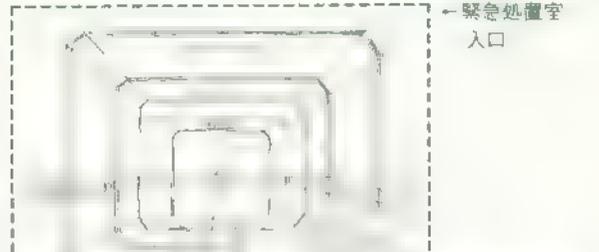
●医療関連の施設

■緊急処置室

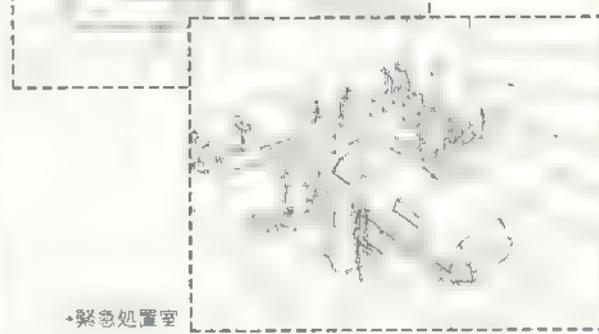
危険な状態にある患者は、直接この緊急処置室へと搬送される。室内にはICU (Intensive Care Unit) カプセルが用意されており、使徒との戦闘によって意識を失った操縦者などは、ここで集中治療を受ける場合が多い。なおICUカプセルはモニターしている患者の生命活動値がセーフティラインを越えて意識が戻ると、自動的に扉が開く



第5使徒フミエルからの攻撃を受けて意識を失ったシンジ。危険な状態であったため、直接緊急処置室へと運ばれた。



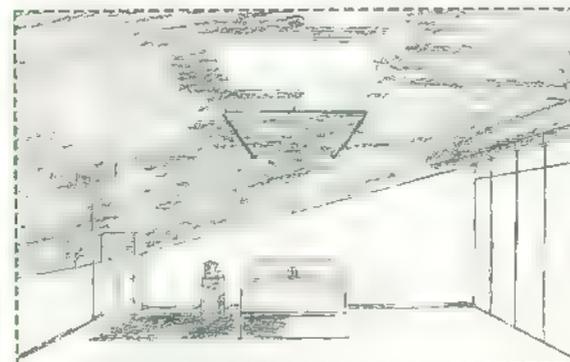
←緊急処置室 入口



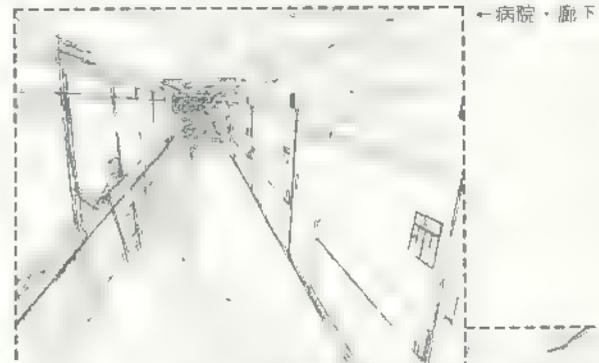
←緊急処置室

■NERV本部内中央病院

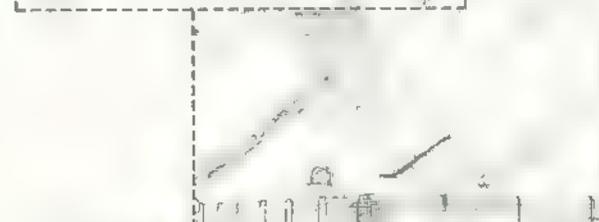
患者(NERV関係者)を収容し、診察、治療を行なうための施設であるNERV本部内中央病院。高度な設備を整えた医療施設と思われるが、病室の設備については非常に簡素である。ちなみにロビーや廊下からは、ジオフロント内の森林を眺めることができる。



←病院・病室



←病院・廊下



←病院・ロビー

特記事項

民間人が持つNERVの情報

NERV本部の活動はほとんど公にされていない。第3新東京市においては相田ケンスケの日記に書かれたように、NERV本部内にはNERV関係者がいる住民が多かったため、ある程度の情報は耳にしたことがあるという者もいたようだ。EVA3号機のNERV本部への暴走が決定した際、同機を操縦する乗組員として選出された相田ケンスケは、その妹を本部の医学部に転入させて養育し、依頼した。少なくとも彼は「NERV本部内に医学部(中央病院)がある」とも「妹が入院している病院がある」とも「その病院の方が高度な医療設備を備えている」とも承知していたと推察される。施設内のセキュリティについては比較的緩く設定していた感があるNERVだが、「人の口には守るべき」という信念にもあるように、職員の間では口を厳しく守るべきという意識はあった。



NERV本部の存在のみならず、その活動が公開された第2次試験場での出来事についても、この事例は身内に情報が漏れていることへの懸念といえる。

NERV本部内における セキュリティレベルの設定

NERV本部への入館時にセキュリティカードが必要となることは先に述べたが、本部内の各エリアにも、入室時にセキュリティカードが必要となる場所がある。ただし、セキュリティカードさえあればどのエリアでも通れるわけではなく、カードごとにセキュリティレベルが設定されていると思われる。

特定の職員に与えられた施設を除き、基本的に本部内での深度が深くなるほどセキュリティレベルも高くなるものと思われる。また、セントラルドグマ内の各施設は作業に携わる職員であれば進入可能であるようだが、第1発令所司令塔やEVA実験施設、EVAのケージ周辺といった特殊な施設に関しては、やはり特殊な制限があると考えるのが妥当だろう。さらに、NERV本部の最下層にあたるターミナルドグマに関しては、ゲンドウやリツコなど上層部が持つセキュリティカードでなければ進入できないよう設定されているようだ。



ターミナルドグマ、確立されている第1使徒アダムの後にリリスと判明。その胸にはロンキヌスの槍が突き立てられている。これが本部地下、安置されているという事実を知る者はごく少数である。

特記事項

NERV本部への侵入

普通市民の特務機関であり使徒狩りに関する普通市民の指揮統率権すら持つNERV本部。その活動内容の詳細がほとんど公にされないため、彼らを危険視する者も多い。もちろんNERV内部における情報の管理も厳格な意味合いもあるだろうが、とりわけそのセキュリティは侵入者への対抗策を兼ねたものと考えられる。

ただし、それらのセキュリティはあくまで防壁を伴った侵入者への対策であり、攻撃を目的とした侵入者に対しては必ずしも万全とは言えない。また、NERV本部のセキュリティは、NERV本部のセキュリティを兼ねたものと考えられる。NERV本部のセキュリティは、NERV本部のセキュリティを兼ねたものと考えられる。NERV本部のセキュリティは、NERV本部のセキュリティを兼ねたものと考えられる。



NERV内部の調査を進めていた加持。ゲンドウの意向するところもかなり比較的自由な身であったが、非常用通路などを活用し容易に各所を探索できることには驚かされた。



広大なNERV本部内には非常用の通路が張り巡らされている。そのほとんどは通路には照明が設置されており、中には安全確保（外敵の侵入）が容易に行えるようになっている。



新世紀年表

NEOS GENESIS
2000-2007

心のかたち人のかたち

ALVAGE PROJECT

2015年、NERV本部では、本部施設とEVAシリーズの復旧作業が開始されていた。使徒の攻撃で、第1発令所は大破し、使い物にならなくなってしまった。近く、破棄されるのは間違いないだろう。予備の第2発令所へ移動するしかない、リツコはマヤと青葉に指示を出す。

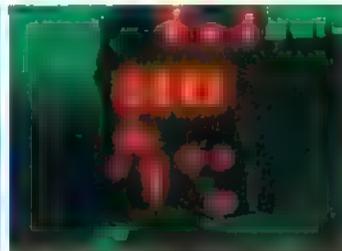
A.D.2015

01 NERVおよびEVAシリーズの復旧作業が開始される

間の中、ゼーレのメンバーたちが密談を交わしていた。第14使徒の侵攻による初号機の3度目の暴走と、自発的なS2機関の取り込み。彼らの描いたシナリオには存在しないこの展開にメンバーたちは苛立ち、ゲンドウへの不信をあらわにする。一方、NERV本部では、本部施設とEVAシリーズの復旧作業が開始されていた。使徒の攻撃で、第1発令所は大破し、使い物にならなくなってしまった。近く、破棄されるのは間違いないだろう。予備の第2発令所へ移動するしかない、リツコはマヤと青葉に指示を出す。



ゼーレの手足があるべきセントウカ。体なにも考えているのか。リツコも面々。



第14使徒侵攻による損傷は大きかった。すべてが復旧する、は時間がかかるだろう。使い慣れた、第2発令所への移動も、今は使えるだけマヤとリツコは述べる。使えるかどうかかわからないのは、初号機ね。

A.D.2015

01 ミサト、リツコと衝突する

シンジは一体どうなったのか？ 目の前の映像に呆然とするミサトに、リツコは、彼は初号機に取り込まれてしまったのだと述べた。「なによ、それ。EVAってなんなのよ!?」憤然と問いかけるミサト。「人の造り出した、人に近い形をした物体としか、言いようがないわね」「人の造り出した？ あのと昔南極で拾ったものをただコピーしただけじゃないの」ミサトは辛らつに言うが、リツコは静かに反論した。「たまたまのコピーとは違うわ。人の意思が込められているのよ」



ミサトは「一気に噴き出した疑問と不信を、リツコにストンと叩きつけた」



「これも誰かの意思だって言うの?」「ある。は。EVAの。炎々と述べられる言葉、か。とな。ミサトは、リツコのほほを平手打ちした「なんとなさいよ。あんたが作。なんでしょう? 最後まで責任取りなさいよ。」

2015年

NERVおよびEVAシリーズの復旧作業が開始される

初号機に凍結命令が下る

エントリープラグ内の探査が開始される

●NERV本部

02 初号機に凍結命令が下る

初号機に対し、さまざまな思惑が巡る

ミサトは日向と共に、ケイジに拘束された初号機を見守っていた。初号機が取り込んだS機関は、いまは完全に沈黙している。だが、初号機は動けるはずのない状況で、すでに3度も起動しているのだ。「目視できる状況だけでは、うかつに触れないわよ」ミサトの表情は険しい。また、執務室では加持がゲンドウの意図を確かめていた。ゲンドウは今回の件は不慮の事故であり、初号機は委員会の別命あるまでは凍結すると答える



初号機は包装状態に納められていた

得体の知れないEVAの挙動、気持ちをほくそつとくか冗談を言う日向たち、ミサトは無言を返す



セレの会議に、NERVに入り込ませた間謀。加持、今度は動いてもらうと、キルカ述べる



セントウの返答、「適切な処置(す)と加持、しかし、こ息を取り込まれたままですか」

03 エントリープラグ内の探査が開始される

一方、初号機の暴走は収まったものの、シンジの安否はまた不明のままだった。試行錯誤の末、ようやく映し出されたプラグ内映像を見たミサトは眼を見張る「なによ、これ……！」そこにはシンジの姿はなく、プラグスーツだけがL.C.L.溶液に漂っていたのだ。



プラグ排出も絶えられず、ミサトたちが眼にしたのは



パイロットの消失したコクピット「あれがシンジクロ率400%の正体とシンジは言っ

●NERV本部

05 アスカ、奇立ちを募らせる

そのころ、レイは、病室で意識を取り戻していた。「……まだ生きてる」ぼつりとつぶやくレイ。ミサトはレイの無事をアスカに電話で知らせるが、アスカは、そんなことでいちいち電話するなと叫び、ヒステリックに電話を叩ききってしまう。ベッドに突っ伏すアスカ。先の戦闘で自分は何にもできず、片や、シンジはみんなの窮地を救った。それがアスカのプライドをひどく傷つけていたのだ。



青く染まった病室内でひとり目覚めるレイ。死の隣から生還したと、ついに彼女の表情に大きな動きはなかった

ヒステリーを周囲の物につけたアスカは、へたっぴ伏してつめた「あのバカシンジに負けたなんて、くやしいわ」



06 シンジのサルベージ計画が立案される

シンジのサルベージ計画が立案された。シンジの肉体は量子状態でプラグ内に漂っているというのがリツコとマヤの見解である。眼には見えないだけで、シンジはそこにいる……つまり、L.C.L.溶液に溶け込んだような状態になっているというのだ。魂というべきものも、そこに存在しているはず。よって、MAGIの補佐を受けつつシンジの肉体を再構成し、精神を定着させるというのが、計画の概要だった。



「シンジくんのサルベージ計画？」リツコから提示された計画を初号機の前で聞くミサト。だが、聞き返す声は不信が満ちている



プラグ内、満ちたL.C.L.溶液は実質、原始地球の海水に酷似しているとマヤ「生命のスペース」にミサトがつぶやく

07 サルベージ計画の要綱が完成

1ヶ月後、リツコはサルベージ計画の要綱を完成させていた。たった1ヶ月でそこまで持ち込んだリツコを賞賛するマヤ。だがリツコは、10年前に実験済みのデータを活用しただけだと述べる。「母さんが立ち会ったらしいけど、私はデータしか知らないわ」「そのときの結果はどうだったんですか？」問いかけるマヤ。リツコはせわしなく端末のキーボードを叩きながら、「失敗したらしいわ」と端的に答えた



リツコが構築したサルベージ作業の計画書。一方、ミサトは、また初号機内部、取り込まれたままのシンジを心配して、た

10年前にも同様の事故があったとマヤ、言うリツコ。そのとき事故にあったシンジの母ユイは、そのまま帰らぬ人となったのだ



ミサト、リツコと衝突する

アスカ、奇立ちを募らせる

シンジのサルベージ計画が立案される

サルベージ計画の要綱が完成

タイムラインシート
imeline Sheet

A.D.2015

02 シンジ、自らの内的世界にひたる

シンジは、自分の内なる声と向き合っていた

リツコらがシンジを救おうとしていたころ、肉体を失ったシンジは、自分の精神世界をぼんやりとただよっていた。輪郭を失った思考を掠めるイメージは、ひどく断片的だ。打ち寄せる波。これまでに出会ってきた人々。使徒と呼ばれる敵。敵。テキ。自分を脅かすもの。やがてそれは冷淡な父のイメージに同化する。恨み、怒り、迷い……。自分に問いかける声は誰のものなのか。シンジはさまざまな感情の奔流に揉まれていく



無人のプラク内、漂うノックス。これはシンジの精神が疑似的に構成したものだ



「あのとき僕は逃げ出さなかった。父さんと母さんから、10年前の事件を思い出さずにはいられない」



「私とひとつにならなう。」ミサト、アスカ、レイ、女性たちの幻像が優しくシンジを誘惑する



敵 自分のテキと同じ言葉を繰り返す。それはいつか自分を呑みようとする。父ゲントウ、母ナツ

03 サルベージ計画、開始

いよいよサルベージが開始された。シンジを取り戻すため、初号機に信号を送り込むリツコたち。ミサトは一連の作業を緊張の面持ちで見守っていたが、あるラインを超えたとき、室内に警報が鳴り響いた。自我境界が固定され、ループ状態から脱せなくなったのだ



サルベージ作業は当初、順調に進んでいたが



赤く染まるモーター。シンジの精神は、同じ場所で堂々巡りを始めた

A.D.2015

04 シンジ、初号機から解放される

嘆くミサトの前に、不意にシンジは生還した

ミサトは、シンジのプラグスーツを抱きしめたまま、泣きじゃくっていた。L.C.L.溶液がすべてエントリープラグから流れ出てしまった以上、計画のやり直しは不可能だ。シンジはもう戻らないのだ……。だが、そのとき、すぐ間近でバシッと水音が聞こえた。顔を上げたミサトは、目の前に現れたものに驚愕する。「シンジくん……!?」初号機の前で、うつぶせに倒れ伏した裸の少年。それは紛れもなく、シンジだった



海中を漂うシンジと、穏やかな波間にたゆたうばかりの光。お母さん、シンジはついに



水音と共に、外界へと戻ってきたシンジ。その後ろで、初号機のコアが赤く発光していた



一体、初号機の中へ、か起きたのか。シンジは、裸のまま意識を失っていた



シンジは安心、きな表情で光のほうへと進んでいく。一方、ミサトは悲嘆にくれていた

A.D.2015

05 ミサト、リツコの誤いを断る

シンジも戻り、とりあえず一連の事件は一段落した。翌日、リツコは仕事後にミサトを飲み誘うが、ミサトは用事があるとあいまいに断る。加持に会うのと鋭く察したリツコは、呆れたようにつぶやいた「シンジくんが無事とわかったら、男と密会とはね」



シンジの生還はミサトの力だろう。リツコは言



「人のことは言えな」か、ミサトを見送り、シンジは皮肉、笑

●NERV本部

2015年

シンジ、自らの内的世界にひたる

サルベージ計画、開始

計画、失敗に終わる

シンジ、母への思い出にひたる

●NERV本部

シンジ、母への思い出にひたる

ふと、なにかの匂いを感じるシンジ。それが幼いころに失った母のものだと、シンジは気づいた。どこからか父と母の声が聞こえてくる。「セカンドインパクトのあとに生きていくのか、この子は。……この地獄に」「あら、生きていこうと思えばどこだって天国になるわよ。だって、生きていますもの」優しい気配がシンジを包んでいた



シンジを包む母の温かな声。母の胸、抱かれ、無心、乳を吸った幼い頃のシンジ。幸せな記憶が呼び起こされる



「男、ナラシム、女、ナラシムと名づけよう、聴こえてくる父の声は、信'られないほど、穏やかに優'る

プラグ内に満たされていた生命のスイッチがこぼれ落ちていく様子にミサトは絶望する



シンジくんを返してよ、一フワフワと抱きしめてミサトは微笑した



10 計画、失敗に終わる

シンジは戻らず、計画は最悪の結果に終わる

警告音が鳴り響く中、リツコはすばやく指示を出していった。だが、シンジの自我境界はループの迷宮から動こうとしない。計画失敗であるリツコは即座に作業中止を言い渡すが、すでに事態は暴走し始めている。初号機の中核に変化が生じ、パルスが逆流を始める。必死で食い止めようとする職員たちの努力も空しく、ついにはプラグが排出されてしまった。開いたハッチからあふれ出すL.C.L.溶液。「シンジくん！」シンジの命が溶け込んでいる液体が流れるのを見たミサトは、悲鳴のような声を上げ、初号機のもとへと走った。



「シンジくん、帰って来なよ、シンジくん、帰って来なよ」



「なにを願うの？、内なる世界、シンジ、語りかける幻像、やがてミサトの幻が言う、あなたはEVAに乗ったから、死ななよ」

●第3新東京市

ミサト、加持と密会

密会のさなか 加持はあるものをミサトに託した

「リツコはいまごろ、いやらしい女だって呆れてるわね、きっと」「情欲に溺れてるほうが人間としてリアルだ。少しは欺けるさ」ベッドの上で、ひそやかな会話を交わすミサトと加持。けだるい空気の中、人類補完計画のことをミサトは訊ねた。NERVとゲンドウの本当の目的はなんなのかと。加持は答えをはぐらかすように愛撫を始め、そのさなか、ミサトに小さなカプセルを渡した。「こんなときにもう……なに？」「プレゼントさ。8年ぶりの」不審げな表情を向けるミサトに、加持は真剣な顔でつぶやいた。「最後かもしれないがな」



情欲、弱れ、おぼろげな自分が自身を欺ける



加持の胸、頭を預けるから補完計画のこと、アダムのことを訊ねる、ミサト、こんなところでは話せないと、加持は答える



情事の最中、不意に産されたもの、驚くミサト、かちと音を立てたのは、小さなカプセルだった

最後のプレゼントになるかもしれない、そう言う加持の面持ちには、つよく真剣な顔があった

A.D.2015

●NERV本部

冬月、ゼーレに拉致される

やがて、新たな事件が起きた。冬月がゼーレに拉致されたのだ。加持が手引きしたらしいとわかり、彼と交流のあるミサトは、諜報部に拘束される。一方、冬月はゼーレの面々から尋問を受けていた。彼らはゲンドウの真意を確かめるため、強硬手段に出たのだ。「我々は新たな神を造るつもりはないのだ」「ご協力を願いますよ、冬月先生」



ミサトの家に電話をかけ、留守電へ伝言を吹き込み、加持の方、ミサトは諜報部、おとなしく身柄を任せこす



「冬月先生か、懐かしい呼びかけ方に、冬月は15年以上前、また大学教授の立場に思いをよせる

シンジ、初号機から解放される

ミサト、リツコの誘いを断る

ミサト、加持と密会

冬月、ゼーレに拉致される

アダム再生計画 — 14年の歳月を費やした神の再生

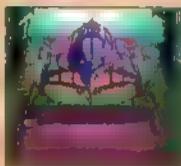
E計画とは、セカンドインパクト後、ゼーレ主導の下に着手された極秘プロジェクトである。その目的は、使徒殲滅のための汎用人型決戦兵器——すなわち人造人間エヴァンゲリオンの開発であった。よってE計画の“E”はEVANGELIONの頭文字に由来しているとされる。その根本は南極で発見された光の巨人＝アダムを再生することであった。つまりE計画とは、「アダム再生計画」であったのだ。それは人類の手で神を作る行為そのものといえた。

EVAの建造は、世界各国に設置されたゲヒルンがそれぞれの研究成果をシェアしつつ、独立併行して進められていった。これは開発当初より最大十数体の量産化が前提とされていたものの、EVA1機の建造に国家予算規模の費用がかかるため、適宜リソースを分散させる必要もあったためと思われる。

2010年、研究開発の母体であるゲヒルンは解体され、特務機関NERVへと移行。E計画も同組織へと引き継がれた。そして、2015年、ようやく日本とドイツで計3機が他国に先行してロールアウト。襲来した使徒への唯一の対抗手段として戦果を上げることとなる。

しかし、果たしてこのE計画は対使徒用兵器開発だけのものではなかったのだろうか？ そもそもE計画の本質は、南極で発見されたアダムの再生である。アダムとは永久機関であるS²機関を持つ巨人であり、アダムが目撃された南極において葛城調査隊が研究していたのも、やはりS²機関であった。さらに言及すれば、ゼーレの中心人物であるキール・ローレンツ、およびE計画の全権を委任された碓ゲンドウは、セカンドインパクト直前まで葛城調査隊に同行していた人物である。これらの要素を鑑みれば、その目的がアダムの活動原理＝S²機関の完全解明とそのテクノロジーの再生にあったと推測できよう。事実、最終的にはS²機関を搭載した量産機が建造されている。ただし、E計画始動よりわずか3年後の2004年、碓ゲンドウはゼーレに対して「人類補完計画」を提唱。以後E計画と並行して遂行していくこととなるが、人類補完計画のプライオリティーは使徒殲滅以上とされた。E計画は人類補完計画を完遂するための一要素となっていたと見るのが妥当であろう。

- EVA
- アダム
- セカンドインパクト
- ゼーレ
- 人類補完計画



E計画の産物である人造人間エヴァンゲリオン。使徒殲滅を目的としたこの兵器の開発には、膨大な予算と歳月を必要とした。



碓ゲンドウは、EVAの開発を目的として進められていた。また、最終的に人類補完計画が提唱された。碓ゲンドウは、人類補完計画の一要素となっていたと見るのが妥当であろう。

E計画の歴史 初号機起動までの経緯

南極大陸で発見されたアダムの複製を人類の科学と教習で試みた一大プロジェクト「E計画」。セカンドインパクトに端を発するこの計画は、14年の歳月を掛けて、ようやくその片鱗を見せることとなる。

セカンドインパクトで失われたアダムであったが、ゼーレの手に残った技術調査資料を基に、人造人間エヴァンゲリオンへの建造は始まる。その中心となったのはゼーレの下部組織ゲヒルンであったが、表向きは人工進化研究所としての活動であった。第7世代コンピュータMAGIは、EVAの建造と並行して開発され、一足先に完成、E計画をサポートしていく。MAGI運用によりEVA開発の作業効率が上がり、実際、MAGIの始動から5年でEVAは完成している。そして、2015年の使徒の襲来に際し、EVAの起動にも成功。これによりE計画は一応の成果を上げ、その後のEVA開発へとつながっていく。



2000年 セカンドインパクト時、南極で目撃されたアダム。その詳細は現在では明らかでないが、EVAは単に機能のみならず、その外見もこのアダムに似せて建造されたとされる。

人工進化研究所の地下研究施設。現在のNERV本部で建造されていたE計画のヒナ型たるEVA零号機。その形状は実用化された零号機と酷似しており、その基本構造はすでに完成していた。



特記事項

碓ゲンドウ空白の7日間

E計画が軌道に乗った2004年、碓ゲンドウ（当時、人工進化研究所長）は、1週間ほどその消息を絶っていた。彼が失踪から戻ってきたとき、すでにキール・ローレンツに対し人類補完計画を提唱済みであったにもかかわらず、その間、人類補完計画実行のために必要な基礎マテリアルの準備などを行っていたことは疑いようがない事実であろう。しかし、失踪直前、彼の妻である碓ユイがE計画に関わる実験中の事故により他界していることも見逃せない事実である。あくまでも推論に過ぎないが、碓ユイの死は碓ゲンドウが人類補完計画を提唱する何らかのきっかけとなったと考えられ、計画との関連性も少なからずあると思われる。



碓の失踪から戻ってきた直後の碓ゲンドウ。このとき、人類補完計画はキール・ローレンツの提唱を得ていたとされる。

碓ゲンドウ

NERV設立前にも所属した碓ゲンドウは、その前段階組織である調査機関ゲヒルンの一員であったほか、南極の葛城調査隊や、その後のセカンドインパクト原因調査チームにも同行していた。



E計画の歴史 [A.D.2000▶2015]

TACTICS SHEET

- A.D.2000.9.15 セカンドインパクト発生。このとき光の巨人（アダム）が姿を現したとされる。
- A.D.2001 E計画始動
- A.D.2002 第一次国連南極調査団、南極に派遣。メンバーには碓ゲンドウ、冬月コウゾウも含まれていた。
- A.D.2003 人工進化研究所、設立。所長として碓ゲンドウ就任。
- A.D.2004 南極方面の富士山麓の地下に巨大空洞を発見。のちにゲヒルン、およびNERV本部として開発が進む。また、この場所はE計画の中核ともなった。
- A.D.2004 冬月コウゾウ、ゲヒルン入所。このときすでにE計画のヒナ型となる零号機の頭部や脊髄などのパーツの試作品が建造されていた。
- A.D.2004 赤木オオコ、第7世代コンピュータの開発に着手。
- A.D.2004 EVA初号機接触実験。このときの事故により、被験者の碓ユイは消失。
- A.D.2004 碓ゲンドウ、人類補完計画を発案。
- A.D.2004 EVA式号機接触実験。このときの事故により、被験者の惣流・シンジのコンピュータウイルスは重度の精神汚染に侵された。
- A.D.2004 セカンドチルドレン選出
- A.D.2004 赤木リツコ、葛城ミサト入所
- A.D.2004 葛城ミサト、ゲヒルン入所
- A.D.2005 第7世代コンピュータ完成。MAGIと命名される。
- A.D.2005 ゲヒルン解体、新組織NERVへと移行
- A.D.2005 零号機起動実験
- A.D.2005 サードチルドレン選出
- A.D.2005 使徒出現
- A.D.2005 EVA初号機起動、使徒と交戦

E計画における実験中の事故

EVAは生物的な側面を強く持っているため、その起動と操作にはEVAと人間の脳波パルスをシンクロさせる必要があり、操作する人間にはEVAと神経接続することが求められた。このEVAとの接続はE計画における最大の難関であり、幾度となく実験が繰り返されている。EVAはアダムという未知なる存在の複製であるだけに、被験者のリスクは当然高く、実験には多大なる犠牲が付きまとったようだ。その意味ではハードウェアとしての機体以上に、起動や操作のためのソフトウェアの開発の方がより困難を極めたと言える。それはEVAの起動確率0.000000001%、通称09(オーナイン)システムと呼ばれるほど低いものであったことから明らかであろう。そのため、EVA実戦投入後もシンクロ実験は頻繁に行なわれており、そのデータ収集が日々行なわれている。



実戦投入されたEVAではあるが、機体とパイロットとのシンクロ率の安定化や向上方法、相関性など、不明確な部分も多い。試験運用的な側面も多々見受けられ、各種の学術的テストが随時行なわれた。

14年におよぶ人造人間エヴァンゲリオン機の建造は、困難の連続であった。その完成までには、単なる科学的な探求心やフロンティア精神では片づけることのできない幾多の犠牲があったことも忘れてはならない。

■ 実験中に発生した主な事故

A.D.2004 初号機接触実験

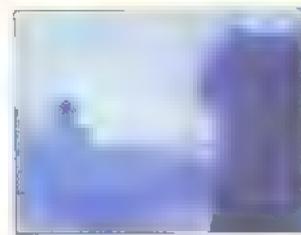
人工進化研究所で行なわれたEVAとの接触実験において、被験者として自ら神経接続に臨んだ生物工学学者の碓ユイは、接続したEVAに肉体ごと取り込まれ消失してしまう。その後、赤木ナオコ博士らによって、サルベージ計画が立案されたが、失敗に終わった。この事故により、EVAとの接触実験が予想以上のリスクの高いことが明らかとなった。



人工進化研究所内で行なわれた碓ユイと初号機との接触実験。被験者はある程度リスクを承知で実験に志願したとされるが、事故は突如として発生した。

A.D.2005 貳号機接触実験

ドイツで開発建造中であったEVA貳号機の神経接続実験にて、被験者となった惣流・キョウコ・ツェッペリンとEVAとの間に事故が発生。このケースでは物理的な接続には成功したものの、被験者の人脳側へEVAの神経パルスが逆流、いわゆる精神汚染を引き起こしてしまう。被験者の肉体には深刻なダメージこそなかったが、精神に重度の障害をもたらした。



EVAとの接触実験により精神汚染を受けた惣流・キョウコ・ツェッペリン自身の娘と人形の別れもできないほどの精神崩壊を起こした。以後、隔離病棟に収容され、治療を受けていたが

A.D.2015 零号機起動実験

EVA零号機と適合するファーストチルドレンによる実用レベルでの起動実験。NERV本部にて行なわれたが、起動プロセス中に零号機は暴走してしまう。エントリープラグの緊急排除機能が働き、パイロットは脱出したものの屋内実験であったためプラグは入破。パイロットは今治1ヶ月の重傷を負った。結果、零号機は凍結され、その後襲来した第3使徒への迎撃には投入できなかった。



零号機に対して適格者であるはずのファーストチルドレンであつた第3次接続開始時、強烈的拒絶反応が発生。零号機は暴走した形で起動してしまい、施設を破壊する

E計画により生み出されたEVA

EVAの建造がもっとも先行していたのは、E計画の中核を担っていた日本であり、2015年にはプロトタイプの零号機、テストタイプの初号機の2機がロールアウト、NERV本部内では運用に向けての起動実験が行なわれていた。これとほぼ同時期に完成を見たのが、ドイツ支部で建造されたプロダクションモデルの貳号機である。一方、これらに遅れてアメリカで建造されていた3号機、4号機は、貳号機を元に建造されたが、不幸にも両機共、事故などにより損失という事態を招いている。しかしながら、EVAの量産は急ピッチで進められ、のちにS2機関内蔵型の新設計による5号機から13号機までの9体の量産機が完成した。

計画の起案段階から、量産を前提として開発が行なわれたEVAは、日本のNERV本部のみならず各国の支部にある生産拠点において、それぞれ建造が進められていた。最終的には(損失機体も含め)全14機のEVAが生産されている。

EVA-00 EVA零号機

ファーストチルドレンと適合するEVAであり、同時期に完成していた初号機に先行して実用レベルでの各種実験が行なわれていた。試作機ながら実戦投入もされた。



実戦用に改修された零号機。肩部に武装が施されている。



EVA-01 EVA初号機

サードチルドレンと適合するEVA。史上初の正常起動を果たし、実戦投入が計られた機体でもある。しかし、暴走など不可解な挙動も多い。



度重なる暴走行動を見せる初号機であるが、その原因は不明



EVA-02 EVA貳号機

セカンドチルドレンと適合するEVA。建造と併行して適格者とのシンクロ及び起動実験も行なわれていたため、零号機や初号機に比べ、スムーズに運用できた。



EVA最初の実戦用モデル。戦闘能力も高い。



EVA-03 EVA3号機

フォースチルドレンと適合するEVAだが、潜んでいた使徒が起動実験直後にパイロットごとシャク。そのため、形式上は放棄され、第13使徒として殲滅されている。



米国より空輸中の3号機。使徒はこの段階で侵入したと考えられている。



EVA-05-13 EVA量産機

使徒より回収されたS2機関をトランスエンシニアリングして製造された実用型S2機関を搭載した新設計のEVA。適格者はなくダミープラグを用いた無人機である。



各国にて建造された量産機は、飛行機能などの最新装備を持つ



特記事項

パイロットの選出

EVAパイロットである適格者となるには特定の条件があり、セカンドインパクト後に誕生した14歳の少年少女であることはそのひとつである。選出にはマルドゥック機関がこれに当たっているとされていたが、この機関は存在せず、基本的に適格者の選定はNERVの思惑次第であったといえよう。ただし、その選出には不明瞭な点が多く、明確な選定基準は謎。それでもセカンドチルドレンやサードチルドレンなどはE計画関係者の子供であるなどの共通点もあった。



ファーストチルドレンの綾波レイ。第1使徒、第2使徒の襲撃に巻き込まれて、ゲヒルンを訪れる。その個人記録は抹消されており、出生等は謎。

セカンドチルドレンの惣流・アスカ・ラングレー。最終実験の犠牲者である惣流・キョウコ・フジツバシンの実子。幼少期から適格者として教育されてきた。



サードチルドレンの碇シンジ。第2使徒とE計画の犠牲者である碇ユイの実子で、使徒襲来直前にマルドゥック機関により適格者として選出された。

作戦報告

使徒殲滅兵器としてのEVA

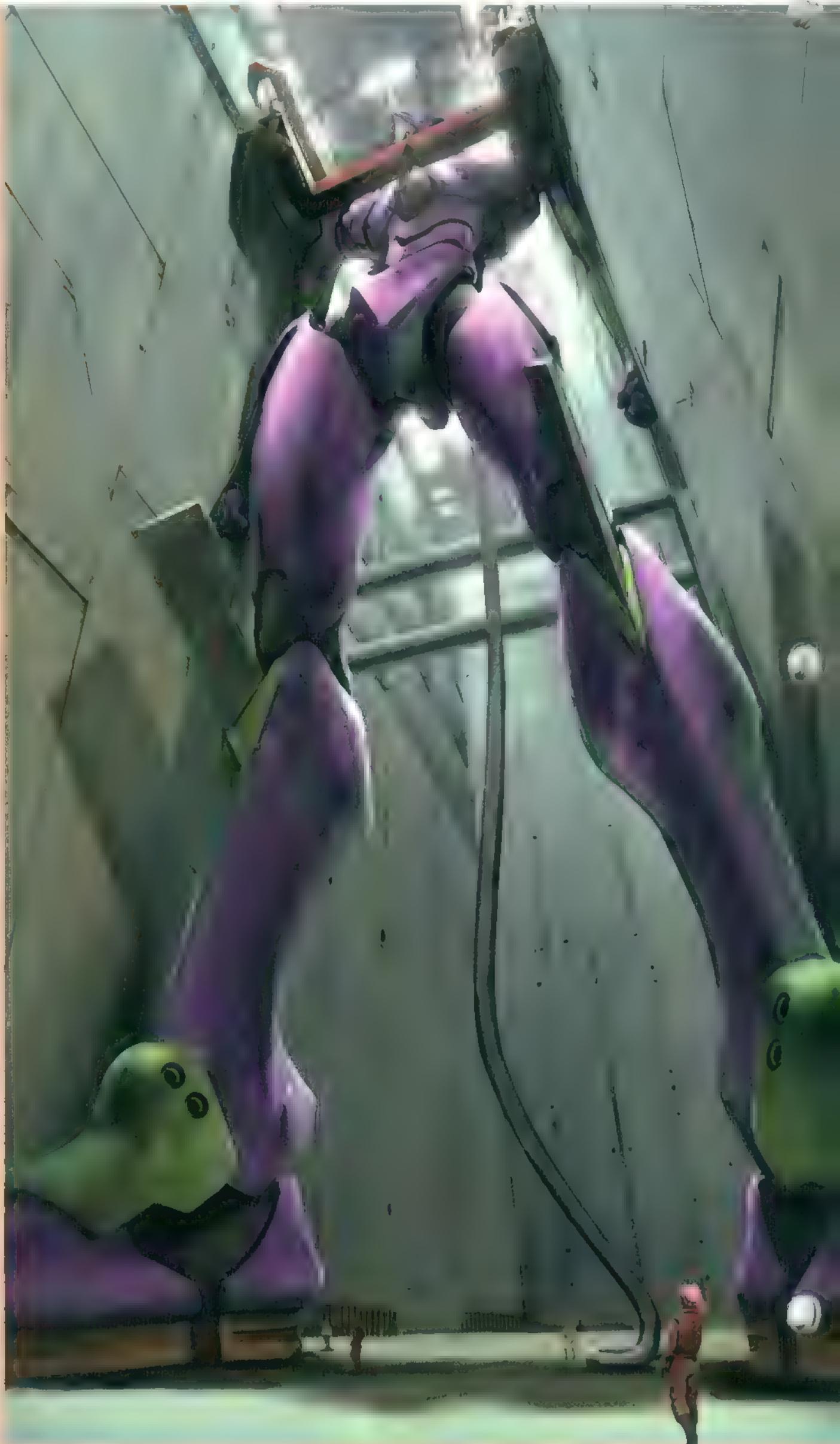
第3使徒襲来に際して、奇跡的にも初めて正常起動し、実戦さえもこなした初号機を皮切りに、その後は零号機、貳号機と、正常かつ安定した形で起動する機体が増え、建造目的のひとつである使徒殲滅用兵器としての運用を継続して行えるようになった。同時に、激化する使徒の襲来に対し、ことごとくこれを撃退するなど、期待された以上の成果を上げており、これをもってE計画は一応の成功をみたと考えられている。E計画に払われた多大な犠牲、そして開発と建造に投じられた膨大なリソースは、無駄ではなかったといえよう。



15年振りに襲来した使徒に対して、EVA初号機は初起動と同時に実戦投入され、結果として使徒を殲滅している。



実戦中死亡した碇ユイと、彼の死を遂げた碇本オスロ。彼らもE計画に関連した犠牲者である。



15年振りに使徒が出現した日 ついにロールアウトしたEVA初号機 アストライノながら実戦投入された最初のEVAである。



第13使徒との戦闘において初めてEVA初号機のダミーシステムが起動された。エントリープラグ内の適格者を介して、類似人格による操縦は非常に残忍であり、第13使徒に容赦のない攻撃を仕掛けた。

エントリープラグ

ENTRY PLUG

人工知能 (Artificial Intelligence) ——、人間と同様の思考が可能な機械、あるいはそのための一連の技術や研究分野の呼称である。「人工知能」という呼び名は非常に曖昧なものだが、おおむね「人間の知能そのもの、あるいは同レベルの思考(推論、学習、問題解決、感性処理など)」が可能なシステム、プログラムと考えて支障はないと思われる。コンピュータの開発が進むと機械的な計算のみならず、それまで哲学や心理学などの分野で論じられていた「人間の知的活動」を行なう機械を作る試みが進められたが、人間と同等の知的活動が可能な「人工知能」の完成には程遠かった。西暦2010年、ゲヒルンにおいて基礎理論が開発されたOS——、第7世代の有機コンピュータに個人の人格を移植して思考させる「人格移植OS」は、人工知能を突き詰めたものといえるだろう。

人格移植OSの技術はNERV本部内、第1発令所に設置されているスーパーコンピュータシステム

「MAGI」に最初に用いられているだけでなく、EVAの操縦に関するシステムにも用いられており、エントリープラグ内のディスクドライブに保存されているという。通常、EVAは専属操縦者を搭乗させたエントリープラグを挿入し、第3次接続までの工程を経て起動後、神経接続がなされている操縦者自身の意思をもって操縦される。しかしNERVは、専属操縦者の擬似人格によってEVAを起動、操縦する手段をも模索し始めており、当然これにも人格移植OSが用いられたものと考えられる。NERV本部の実験場で行なわれた第1回相互互換試験——、綾波レイが初号機、碓辛ジが零号機に搭乗するかたちで実施された試験において、両者は操縦に支障がない程度のシンクロ率を記録。この試験の結果を受けた赤木リツコは、当初より構想していた「ダミーシステム」計画——、操縦者をバックアップする特殊なシステム「ダミーシステム」と、適格者を搭乗させない特殊なプラグ「ダミープラグ」の製作を本格的に進行させることを示唆するのである。

ちなみに、リツコが「人の心、魂はデジタル化できません」と口にした通り、擬似人格はあくまでフェイ

クであり、モデルの思考パターンを元に作られたデータである。操縦者の代わりとして動作できるが、それはあくまで与えられた外部的要因を元に思考しているに過ぎず、人間のような心を持つことはないのである。とはいえ、これについては異なる考え方もある。システムのコアとなる部分には人工知能ではなく、複製されたと思しき生体が用いられていたというのである。その真相は不明だが、擬似人格の元となったレイが替わりとなる肉体を持つ「造られた存在」であると推測されること、リツコの片腕ともいえる伊吹マヤが同システムに対してあからさまな不快感を示していることは、この事実につながるものとも見ることもできるのではないだろうか。

RELATED MATTERS

- EVA
- 綾波レイ
- 碓辛カヲル
- シンクロ



国連直属の特務機関NERVが有する汎用人間型決戦兵器。なお、量産機と呼ばれるEVA5~13号機はセーレが有していた

特殊システム「ダミープラグ」

機能と特徴

EVA操縦者のバックアップとして用意されたダミーシステムと、乗客を搭乗させずにEVAを起動及び操縦するためのダミープラグ。共に起動、操縦は擬似人格が行なうという点において同様のシステムが使われていると推察される。

ただし、実際にダミーシステムを用いた対第13使徒戦においてはその有用性を示したものの、開発の責任的な立場にいた赤木リツコは、起動実験や実戦で運用するには問題点が多いと判断しており、使徒戦への導入はNERV最高司令官である碓ゲンドウのなかば独断ともいえるものであったようだ。

主にEVAの操縦に関するシステムが保存されている巨大なディスクドライブ。ダミーシステム起動時にはシステム名と共に「REI」の文字が浮かびあがる。

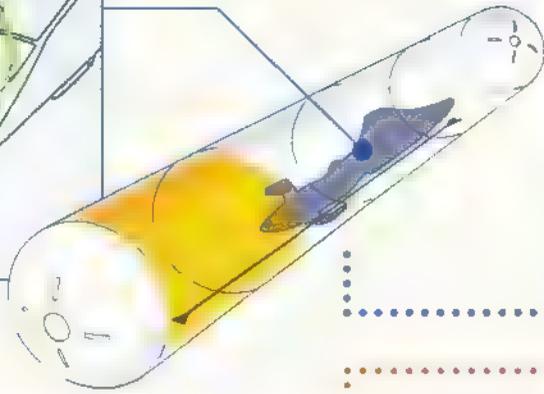
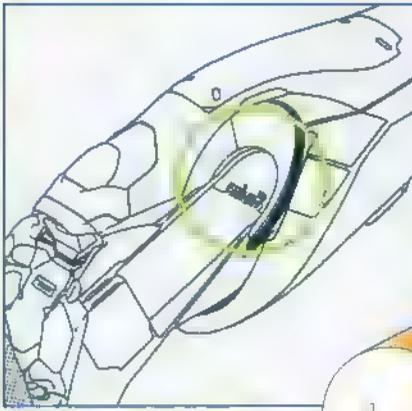


EVAの起動と操縦も、操縦者なしで行なうためのダミープラグ。深紅の塗装が印象的だが、形状は初号機、試号機用モデルのエントリープラグとほぼ同形である。

EVAの起動、操縦とダミーシステム ダミープラグ

ダミーシステムとダミープラグは直接EVAとの神経接続を行ない、起動、操縦可能なシンクロを保つ。それぞれにはあらかじめ適格者のパーソナル(=擬似人格)が移植されており、

EVAに操縦者がいると誤認させることで、EVA関連のオペレーティングが可能となるようだ。なお、それぞれを使用した際は戦闘行動に特化され、過剰なまでの攻撃性を発揮する。



エントリープラグ内のノート後方にはディスクドライブが設置されている。その中に書き込まれているダミーシステムは、適格者が搭乗している状態でも使用可能である。なお、同システムへの移行は発令所で操作され、切り替え後は同乗した適格者による操作を受け付けなくなる。

適格者を搭乗させずにEVAに搭載する特殊なプラグ形状面ではエントリープラグとの差異は見受けられない。特定の適格者の思考パターンが移植されており自動的に作戦行動を行なうが、その内部構造は明らかにされておらず、詳細を知るものは一部の人間のみと思われる。

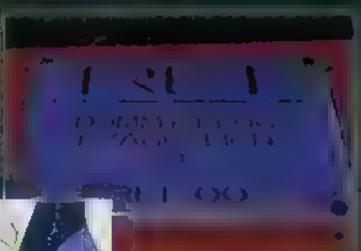
擬似人格(ダミー)によるEVAの起動と操縦

機能と特徴

EVAの起動と操縦に用いられる擬似人格。詳細は不明だが、そのシステムにはMAGIと同様に「人格移植OS」が活用されているものと考えられる。しかし、リツコ自身も「パイロットの思考の真似をするだけの機械」と口にしたようにあくまで擬似的なものであり、問題点も多かったようだ。

ちなみに、システムのコアとなる部分には複製された生体が用いられているという噂も実しやかに囁かれているが、その事実もダミーシステムとダミープラグの製作に関わった技術者と、NERV上層部のみが知るところである。

NERV本部が所有するダミープラグ。その外装部に貼り付けられたプレートには、ダミーシステムと同様に「REI」の文字が大きく刻まれている。



技術開発部が中心となって進めていたと思われるダミーシステム計画。だが、リツコに傾倒しているマヤですら、その計画には難色を示していた。

ダミーシステムの実用例

ダミーシステムは、第13使徒に寄生されたEVA3号機との戦いにおいて初めて使用された。迎撃したEVA初号機操縦者の碓ゲンドウは3号機の操縦者の身をまじえて攻撃を加えることをためらい、その独断的な行動に業を煮やしたゲンドウがダミーシステムへの切り替えを指示。シンジとのシンクロをカットされた初号機はダミーシステムと直結され、第13使徒に容赦のない攻撃を加えた。なお、システムデータにはダミープラグと同様のものが流用されていると考えられる。ただし、対第13使徒戦の直前においてもダミープラグは試作品であり、ダミーシステムについても未完成であったと思われる。



ダミーシステムが操るEVA初号機は、第13使徒と識別されるに至ったEVA3号機に容赦のない攻撃を加えた。その徹底的な攻撃行動は、活動を停止したEVA3号機のエントリープラグにまで及んだ。

ダミープラグの実用例

ダミープラグは、第14使徒迎撃時に初めて使用された。一時的にNERVを去っていたシンジの代わりに綾波レイを操縦者として搭乗させたものの、初号機はこれを拒絶。ゲンドウの指示により、レイの代わりにダミープラグが搭載された。しかし、初号機はこれをも拒絶したため、実際にはNERVが製作したダミープラグがEVAを動かすことはなかったといえる。ただし、これはダミープラグが未完成だったためではなく、初号機がシンジ以外の人格を拒絶したためとも考えられる。なお、ゼーレ直轄のEVA量産機は、同様にゼーレ主導で製作されたダミープラグにより起動、操縦が行なわれていた。



NERV本部襲撃の際、9機のEVA量産機はすべてダミープラグによって起動、操縦されていた。ただし、搭載されていたダミープラグは、NERV本部が所有するものとは異なる擬似人格が移植されていたようだ。

追加報告

ダミーとなる人格について

ダミーシステム及びダミープラグの擬似人格は、なぜかEVAに対応した操縦適格者の人格ではなく、レイまたはカヲルのパーソナルが移植されたものである。そうした理由は定かではないが、人類を生み出したとされるリリスの魂を持つレイと、第17使徒タプリスであり、使徒を生み出したアダムの魂を宿したカヲルのパーソナルが共に擬似人格に用いられるかたちとなっていることは奇妙な符合といえるだろう。



NERV本部所有のダミープラグにはレイの人格。ゼーレのダミープラグにはカヲルの人格が移植されていた。だが、あくまで擬似的な人格であったため、当然ながら実戦での判断、思考能力は適格者本人にはおぼなかつた。

CATEGORY

ふ

ファースト

綾波レイに対する惣流・アスカ・ラングレーの呼称。「ファーストチルドレン」の略称だと考えられる。アスカは知人のことを名前と呼んでいるが、初対面以降はレイに対し名前で呼びかけたことは一度もない。なお、アスカは「優等生」とも呼称している。



「ファーストって怖い子ね。目的のためなら手段を選ばないタイプ」とレイを評すアスカ。レイに対して棘のあるアスカの態度から、愛称の類ではないことは確かだ。

ファーストインパクト

別名ジャイアントインパクト。約40億年前に起きた地球と小惑星との衝突を指す名称で、地球から月が分離する原因となったとされる最有力の説である。これによると、地球正面からではなく斜めに小惑星が衝突した影響により、宇宙空間に飛散した小惑星の破片と地球内部のマントルの一部がのちに合体して月が形成されたという。また、2000年9月13日に南極で発生した大爆発がファーストインパクト以来の隕石衝突による天災とされたため、セカンドインパクトと呼ばれるようになったようだ。中学校の歴史教科書でセカンドインパクトと共に触れられているほか、南極大空洞をスキャンした国連調査団の資料内にはジャイアントインパクトという名称が確認できる。

ファーストエイド機能

プラグスーツの応急処置機能。機能詳細については不明だが、着用した操縦者を蘇生させる際などに利用されている。



スーツ中央にある球状パーツは着用者の心臓に電気ショックを送るためのもの。これにより第5使徒ラミエルの加粒子砲によって心停止に陥った碓シンジを蘇生させた。

ファーストチルドレン

マルドゥック機関が選出した最初のエヴァンゲリオン操縦適格者。綾波レイがファーストチルドレンであり、EVA零号機の専属操縦者である。最初の零号機起動実験は失敗に終わり負傷するが、2回目の起動実験では成功。以後は問題なく作戦に従事している。EVAとのシンクロ率は高くはないものの安定した数値を保っているようで、戦闘においてはバックアップに回ることが多い。また、死海から引き上げたロングギヌスの槍をリリスの身体に保管するという処置を碓ゲンドウから一任されており、ほかのチルドレンなどには極秘の任務も行なっているようだ。綾波レイも参照。



第1回機体相互交換試験においてはEVA初号機ともシンクロしており、サードチルドレンと近い特性を持つと考えられる。

フィフスチルドレン

マルドゥック機関が選出した5人目のエヴァンゲリオン操縦適格者。渚カヲルがフィフスチルドレンであり、セカンドチルドレンの代わりにEVA弐号機の操縦者として本部に派遣される。ファーストチルドレン綾波レイと同様に、カヲルに関する過去の経歴は抹消されており、MAGIが全力で彼のデータを洗っても何も分からなかった。実際のところはマルドゥック機関に選出されたわけではなく、ゼーレの手により人為的に送り込まれた第17使徒タブリスがその正体であった。



シンクロ実験の際、コアの変換なしで自由に弐号機とのシンクロ率を設定して見せたフィフスチルドレン。その「有り得ない」能力はNERVの面々を驚愕させていた。

フィフスマルボルジェ

セントラルドグマ内の施設のひとつ。戦略自衛隊がNERV本部施設の直接占拠を目論んだ際に熱滅却処理を施されている。マルボルジェも参照。

封印

第14使徒ゼルエルを捕食し、S²機関を取り込んだEVA初号機がケージに拘束された際、同機の素体に直接巻かれていた包帯に施されていたゼーレの封印。包帯のところどころに札のようなものが貼られている。初号機の凍結を意味するほか、その活動を抑制する何らかの効果を持つかもしれない。



ゼーレによる封印が施されているということは、事実上初号機の使用禁止措置が取られたということである。

プール

第3新東京市立第壹中学校における施設のひとつ。主に体育の授業で使用される。常夏の日本では、体育の授業において水泳が大きなウェイトを占めるものであると推測される。



和気藪々と水泳の授業を受ける第壹中学校の生徒たち。暑い最中のプールでの授業は彼らにとっても好ましいものであるようだ。

フェラーリ328

イタリアのフェラーリ社により1985年から1989年まで製造、販売されたスポーツカー。フェラーリ308GTB/GTSの後継車で、2シーター、エンジンは3185ccの90度V型8気筒DOHCを搭載する。葛城ミサトが碓シンジの学校に向かうため、タルガトップスタイルのGTSに乗って現れた。なお、電気自動車としての改造はなされていないようである。



フェラーリで三者面談に訪れる保護者などは他におらず、駐車場への派手な車庫入れで大変な目立ちようであった。

フォースチルドレン

マルドゥック機関が選出した4番目のエヴァンゲリオン操縦適格者。鈴原トウジがフォースチルドレンであり、EVA3号機の専属操縦者である。チルドレン候補者を集めた第3新東京市立第壱中学校2-Aの中で、遠やかにコアの準備が可能であったためにトウジが選出されることとなった。3号機起動実験の際に「これだと即、実戦も可能だわ」と赤木リツコは語っており、適格者としての素質は十分だったようだ。しかし、3号機が第13使徒バルディエルに乗っ取られたため搭乗した機体の破壊に巻き込まれ左脚切断の重傷を負い、彼が実戦に参加することはなかった。



フォースチルドレンに選出されて向こう、トウジの様子はそれまでと一変していた。それはEVAに乗る友人、碓シンジの苦悩を知っている故であろうか。

フカヒレチャーシュー大盛り

第10使徒サハクィエルを殲滅した後に、戦闘に勝利した褒美として葛城ミサトの奢りで行った屋台にて惣流・アスカ・ラングレーが注文したラーメン。肉嫌いの綾波レイがチャーシューを抜いてもらっているのとは対照的な注文内容である。本来ならステーキを奢ってもらうはずだったが、レイの肉嫌いとミサトの懐具合を考慮して、ラーメンの屋台へと切り替えるという配慮をアスカは見せている。



チャーシュー4枚、フカヒレの姿煮2枚に加えて、煮玉子、ナルト、海苔などがトッピングされており、かなり豪華なラーメンであった。

復元

あるものをもとの状態や位置に戻すこと。人類補完計画においては、復元されたアダムとされる胎児状サンプルが要となっていたようである。また、これはアダムそのものの再生を目指すアダム計画の一環であったとも推測できる。



EVA初号機は、破損した腕を2度復元している。第3使徒サキエル戦では折られた左腕を、第14使徒ゼルエル戦では破壊されて失った肘から先をゼルエルの腕を用いて復元した。

副発令所

中央作戦司令室の下層に位置する副発令所。両翼に伸びており、左と右の副発令所に分かれている。



戦略自衛隊は左副発令所の壁を爆破して発令所に乗り込んだ。NERVスタッフが第2発令所の通路にバリケードを張って抵抗するが、結局突破されてしまう。

フケツ

第3新東京市及びジオフロントの大停電から回復した後のNERV本部内エレベーターにて、あられもない格好で重なり合っていた葛城ミサトと加持リョウジの姿を見た伊吹マヤが呟いた言葉。



実際のところはミサトと加持にやましいことがあったわけではないのだが、一見しただけで「フケツ」と言い捨てるマヤの潔癖ぶりは相当なもの。

二子山

神奈川県足柄郡箱根町にある山のひとつ。典型的な槽鉢山で、神奈川県と静岡県にまたがる箱根山と総称される火山の中にあり、上二子山（標高1,091m）と下二子山（標高1,065m）のふたつに分かれる。ヤシマ作戦において、目標である第5使徒ラミエルとの距離、地形、手頃な変電設備などから、この山の山頂が狙撃地点に設定された。また、戦略自衛隊がNERV本部に侵攻してきた際には発令所のオペレーターがこの二子山と駒ヶ岳を緊急封鎖する旨の指示を出している。



ラミエルを見事殲滅したヤシマ作戦は、別名「二子山決戦」とも呼ばれている。

冬月コウゾウ

特務機関NERVの副司令を務める人物。総司令碓ゲンドウ

の傍らに立ち、彼の理解者としてその業務を補佐している。ゲンドウが司令席を離れた際には、代わって指揮を執ることもあるほか、第3新東京市評議会の定例への参加など、雑務を押し付けられているようだ。趣味として将棋をたしなむ。1999年頃は京大で形而上生物学の教鞭を執っており、碓ユイはその教え子のひとりであった。彼女に六分儀ゲンドウを紹介されるも、当初はあまり良い印象を持っていなかったようだ。セカンドインパクトが発生した直後の混乱期には愛知県の豊橋市跡でもぐりの医者をしてしたが、その後、2002年にセカンドインパクト調査隊の一員として南極調査船に乗船し、ゲンドウと再会。2003年にはゼーレや死海文書に関する事など、セカンドインパクトの真相を公表しようとしてゲンドウに詰め寄るが、箱根の地下で建造中の人工人間エヴァンゲリオンを見せられたことにより逆にゲンドウに協力、唯一無二の理解者となっていく。なお、ユイに対しては特別な感情を持っていらしく、人類補完の瞬間に冬月が見たのは彼女の姿であった。



先輩の教授には人付き合いが悪いと指摘されており、冬月にも自覚はあったようである。しかし、その性質とは関係なく学生からの人気は高かったようだ。

プラグスーツ

エヴァンゲリオン操縦適格者がEVAに搭乗する際に着用する専用スーツ。操縦に必須のものではないが、操縦者の生命維持やEVAとの神経接続のサポート、生体反応モニターなど多彩な補助機能を持っている。大きめに作られたプラグスーツを素肌にまとったあと、左手首にあるスーツフィットスイッチで身体にフィットさせて着用する。左手甲部にはハンドモニターがあり、ここで生命維持モードの経過時間などが確認できる。また、バッテリー切れのランプもここにつけられている。通常のプラグスーツ以外にも、耐熱耐圧仕様のプラグスーツ等も存在し、これは第8使徒サングルフォン捕獲作戦において、火口にダイブする際に使用されていた。基本的なデザインは似通っているが、適格者ごとにカラーリングは異なる。碓シンジは青、綾波レイは白、惣流・アスカ・ラングレーは赤、鈴原トウジと渚カヲルは黒と青を基調としたものを着用。例外として、シンジがアスカの手引きでEVA式号機に乗せられた時のみ、彼女用の赤いプラグスーツを着用していた。そのため、デザイン以外の機能面は互換性が大きいと考えられる。



神経接続インターフェイスを有効にするため、下着などは身に着けず素肌に着用する。

以上が、本企画の概要です。

このように私たちは、
システムの中の人間、組織と人間の有り様
を描きます。

現在、社会全体で失われつつある、他人とのコミュニケーション。
家族や組織（学校）内での人間関係が、今や崩壊しようとしています。
視聴者は、主人公の眼を通して、家族、友人、大人、社会との
コミュニケーションとは、何なのか？ を考えていきます。
子供たちは、もはやマンガとゲームの中でしか、社会的擬似体験を知りません。
だからこそ、本アニメーションを観て、マンガやゲームでは味わうことの
出来ない「人の連なり」や「感動」等、フィルムならではの「おもしろさ」
を知ってもらいたい、と考えています。

また、私たちは、
斬新なイメージで、巨大ロボット同士の戦闘
に挑戦します。

不可視及びスペクトルレーザーや高周波ナイフ、使徒を破壊できる最後の武器
「ロンギヌスの槍」等の、**多彩な新兵器**。
山稜や田園等の美しい日本の自然や特殊な街並多用されるナイトシーン等の、
新しい舞台。
アニメーションが持つ動きの、**気持ち良さ**。
これまでにないビジュアルイメージを持った戦闘シーンの数々。

私たちは、
90年代後半にふさわしい
新たな時代のロボットアニメーション
を目指しているのです。

企画・原作 株式会社ガイナックス

KEYWORD

システムの中の人間

子供のコミュニケーション能力の低下は、作品放映当時はもちろん、現在も続く社会問題のひとつである。作品の主人公のシンジも、そんな時代背景同様に他人とのコミュニケーションが苦手な少年である。この設定は本作のテーマが現代社会システムにおける対人関係を描くのに必要不可欠であった。他人との関係を築けない少年を主人公に据えることで、このテーマはより浮き彫りとなっているのだ。作品では組織と人間の有様、関わりようが随所で見られる。



作品の主人公である碇シンジは、他人との接触を嫌ってかイヤホンを付けて音楽を聴いていることが多い。それは自分の殻に閉じこもるような行為であるが、彼は人嫌いでではなく、他人との関わり方が解らない少年と言った方が適確であろう。

第貳拾四話より、シンジとカヲルの出会いのシーン。作品においてシンジは、“NERV”という社会システムの中で様々な出会いを経て、人との信頼、さらには苦い責任などを経験し、成長していく。



シンジにとっての父親のゲンドウは、ある種の障害となっている。また、作品の登場人物たちの多くが“家族”との関係性に何らかの問題を持っていた。



KEYWORD

新たな時代のロボットアニメーション

主役ロボットの従来のイメージを覆したEVA。しなやかなデザインと、頼と備で見る野心的な表現が斬新である。また制御不能となる初号機の「暴走」もインパクトが強かった。

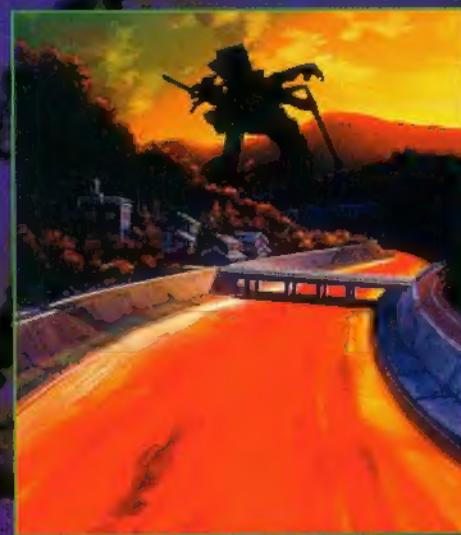


KEYWORD

斬新なイメージ



旧劇場版のクライマックスで、レイと融合を果たしたリリス。雲海を突き抜けるほどの巨大な身体、毒々しい空の色、宗教的儀式を匂わせる文様のエフェクトなど、悪夢的不条理感漂う異彩を放つシーンとなっている。こうした絵作りも、「エヴァ」ならではのオリジナリティ溢れるものである。



第拾参話より、ハッキングされたMAGIの状況を示すモニタ。赤色の増殖する演出で、ビジュアル的にも危機感を煽っている。

第拾八話より。夕景の中、漆黒のEVAのシルエットと敵の体液で真っ赤になった手前の川との強烈なコントラストが、戦いの凄惨さを表現している。

従来の作品ではタブー視される傾向のあった残虐的な戦闘シーン、モニタ表示を利用したサスペンス演出、観念的で不条理な画面構成など、エヴァには斬新なシーンが多かった。それだけにエヴァはビジュアル面においても、その後の作品に多大な影響を及ぼしている。放送から10年以上経った現在も、その影響力は強い。



宗教的な設定を象徴するOPのセフィロトの樹。作品はリアル志向のメカSFながら、オカルティズムの要素が多く含まれているのも特徴である。

終末論的なカタストロフィを連想させるセカンドインパクト。発生日時である2000年9月13日も含め、90年代後半の作品らしい世紀末を意識した設定といえる。



エヴァは、90年代にマイノリティになりつつあった巨大ロボットアニメにおいて、テーマ的にもビジュアル的にも、新たな突破口を開くべく企画された。そのため、従来のアニメにはない新たなアプローチが幾重にも試みられており、その多くが企画当初より練られていたことが35ページにもおよぶ企画書より読み取れる。エヴァという作品が今なお輝きを保つ理由は、ロボットアニメの新たな魅力を引き出そうとする気概と熱意が、そのまま映像として結実しているからといえよう。